

## 人・地域・環境・地球 — すべてに“やさしさ”を追求した 国内最大規模のツーバイフォーによる特別養護老人ホーム 大分市・「明治清流苑」

2006年7月1日、木造としてはわが国最大規模のツーバイフォー工法による特別養護老人ホーム「明治清流苑」が大分市にオープンした。設計・監理は吉高久人一級建築士（吉高久人総合設計コンサルタント代表）、施工は安藤建設（株）九州支店。当協会の会員会社が協力して一大プロジェクトを成し遂げた。特養施設の建築は、ツーバイフォー工法が耐火構造の認定を取得するまで木造では不可能であっただけに、またかつてない規模の建物ゆえに設計・施工には数々の未知との戦いがあったという。しかし、その完成は、今後の木造建築物の可能性を拓ける端緒として、日本の建築界のみならずツーバイフォーの本場カナダでも注目を集めた。

さらに注目すべきは、“そのやさしさ”である。木の建物はそこに暮らす高齢者はもちろんのこと、働く人たちにもやさしい。資源として再利用が可能な木材を用いることは、地球環境にやさしい。そして、地域交流の場を設け、災害時の防災拠点ともなるべく計画された苑は、周辺地域に対してもやさしい。苑を運営する社会福祉法人永生会清流苑理事長の児玉貞夫氏はこう語る。「人が住まう場所として一番よい環境は、と考えたとき、すべての面でやさしさのある木造・ツーバイフォーこそ理想だという結論に達しました」。



▲周りの自然環境に溶け込む外観全景。デザインのモチーフは地中海沿岸に建つヴィラ。土壁を思わせる外壁があたたかな雰囲気を出す



▲玄関ホール。室内は“大正ロマン”のイメージで構成され、ホールの談笑の場も囲炉裏端の趣

◀吹き抜けから光が降り注ぐ2階中央ホールは、人が自然に集まる求心的な空間に

### 外観は地中海様式をモチーフにした、周辺の自然環境に溶け込むデザイン

丘陵地の北東部南側斜面に配された建物は十字型で、北側居室をつくらなように軸方位を45度傾けている。建物の周囲は、アーチ型の壁に守られて回廊風のバルコニーが取り巻く。ここは内部でも外部でもない中間的な領域。日本家屋の縁側のように、居室から一歩出て自然と対話できる空間となっている。



▲エントランスから丘の上にゆったりと佇む建物を見上げると、左右にのびるユニットが両手を広げているように見え、そのやさしい表情に心がやすらぐ



▲外壁は珪藻土入りの吹き付け仕上げ。軒下には随所に段状のデザインが施され、趣のある表情を創り出している



▲省エネと環境への配慮から地下・歩行浴槽の屋根は緑化



▲バルコニーからさまざまな景色も楽しめる



▲バルコニーは車いすでの移動もスムーズ



▲連続するアーチが外観の美しさを引き立てる



▲温泉利用の歩行浴槽室は地域の人々にも開放



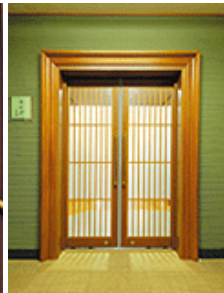
▲地域交流スペースは多目的に活用

### 大正ロマンが漂う各ユニットはひとつの家庭。リビングダイニングで集い、個室でくつろぐ

ユニットは計5カ所（1階1、2階4）。家庭的な介護を目指し、それぞれのユニットはひとつの家のように独立性をもたせ、ユニットごとに和のテイストのテーマ色を設定。中には広い廊下の左右に専用トイレ付きの居室が10室。くつろぎや食事の場として中央に共有のリビングダイニングが、廊下の突き当たりに談笑コーナーがある。（写真はショートステイ用のユニットだが、内部の作りは特養部分も同じ）。



▲各ユニットはひとつの家と想定。それぞれのユニットの出入り口には引き戸が設けられている。インテリアはどこか懐かしい大正期の和洋折衷住宅のイメージ



▲おしゃれな扉を開けるとトイレ。省スペース化と介護しやすさを図るため便器を斜めに配置



▲居室も和のテイスト。外にはバルコニーが続き大きな開口部から風が吹き抜ける



▲居室の入口は車いすで楽に通れる幅を確保。内には専用の洗面コーナーとトイレがある



▲各ユニットの中央部には開放的なリビング・ダイニングが。キッチンも併設され、家庭的な雰囲気



▲デイサービス用の食堂兼機能回復室。和室や専用の浴室・トイレも完備



▲戸外でくつろげる回廊風のバルコニーはデイサービスの利用者にも好評

### 「明治清流苑」建築の経緯

「明治清流苑」の建築計画がスタートしたのは約2年前。本部である「清流苑」が築後30年を迎えるにあたり、これからの特養施設の有りようを模索していた児玉理事長は、新たに分院を建てることを決意。本部の入所者の一部を新しい施設に移すことで、すべてを個室化する計画を立てられた。「人は高齢になっても人間としての尊厳がある。それを尊重するためには、最低限でも個室を用意する必要があると考えました。これは国の方針にも合致するものでした」と、児玉理事長。

選んだ敷地は古くからの住宅地に隣接する緑豊かな丘陵地。自然環境がよだけでなく、市街地からも遠くないので家族が面会に



来やすい。また、目の前に住宅群が広がり、隔離感がない。そのうえ周辺に地域の福祉施設がないので、地域の福祉拠点としても役に立てる。まさに理想的な条件であった。

建物に関しては、かねてから、すべてに“やさしい”施設をつくりたいと考えておられた児玉理事長のこと。吉高氏からのツーバイフォー工法による提案を迷うことなく受け入れたといわれる。

とはいえ、計画は設計の段階から難題が続出。とくに、かつてない規模の建物ゆえ構造計算には苦慮。建築確認を受けるための作業も膨大なものだった。着工後は現場の人間も戸惑うことばかり。そのうえ長雨にたたられるなど困難の連続だったが、設計に約12カ月、施工に約8カ月をかけて建物は完成を見た。



「みな初めて経験することが多く、大変だったと思いますが、工事が始まってからは実にスムーズでした。ツーバイフォー工法の建て方を見て、その合理性を実感しました。また、木がふんだんに使われているせいか建物の断熱性がよく、居住性もよい。非常に優れた、魅力的な工法だと思います」と、児玉理事長。

建物は延床面積約4470m<sup>2</sup>のうち、RC造の地下部分を除く1～2階の3802m<sup>2</sup>をツーバイフォー工法で建築。外壁、屋根、間仕切り、床の各構造部位は、国土交通大臣認定の耐火構造仕様となっている。室内外の仕上げ等には、地元大分県・玖珠産の良質な珪藻土をはじめ、健康によく環境にやさしい素材が随所に使われ

ている。

設計にあたり吉高氏は、自ら車いすに乗って視線の高さや動きをシミュレーション、介護も実際に体験して、それらをプランに反映させたという。中央ホールを中心に各ユニット（居室スペース）を十字型に配するという発想もその体験から生み出され、それぞれのユニットの独立性の確保と介護をするスタッフの効率的な動線を実現している。

「以前に比べ、介護する側とされる側との距離も縮まり、入所者の安心感も高まったようです」と、苑長の児玉末美氏。一方、事務長の金丸誠一氏は、自然の光や風を存分に取り込める設計を高く評価。「ランニングコストの統計はまだ出ていませんが、良い結果が期待されます」といわれる。また、木造の利点のひとつとして、建築中に工事関係者から「RCの建物に比べて足への負担が少なく、1日中歩き回っても疲れない」という声が出ていたとも聞く。

オープンから1カ月を経た7月31日現在、「明治清流苑」には49名のお年寄りが心おだやかに暮らし、併設されたデイサービスセンターや地域交流スペースには、近隣から大勢の人が通って来ている。

「入所者は、心なしか以前より落ち着いた表情になったように思います。家族の方々も頻りに面会に来てくれるようになりました。そのことが何よりうれしいですね。私たちが目指したのは、入所する人も、その家族も、ここに居ることを誇りに思えるような施設。家庭的な雰囲気の中で、家庭的な介護をしていきたいという願いが最上のかたちになりました。あとは私たちが魂を入れ、真によい施設にしていきたいと思っています」と児玉苑長は語っている。



「明治清流苑」苑長  
児玉 末美氏



社会福祉法人永生会  
理事長 児玉 貞夫氏



「明治清流苑」事務長  
金丸 誠一氏



(有)吉高総合設計コンサル  
タント 吉高 久人氏

## 「明治清流苑」の概要

- 用途地域／ 第一種中高層住居専用地域 宅地造成規制区域
- 敷地面積／ 6,931.84m<sup>2</sup> (2,096.88坪)
- 建築面積／ 2,039.03m<sup>2</sup>
- 構造・規模／ 地階：RC造 667.87m<sup>2</sup>  
1階：枠組壁工法（耐火構造）2,003.04m<sup>2</sup>  
2階：枠組壁工法（耐火構造）1,798.32m<sup>2</sup>  
延床面積：4,469.23m<sup>2</sup> (1,351坪)
- 使用木材／ 合計866m<sup>3</sup> (カナダ産)
- 所要室／ 地階：地域交流スペース、歩行浴槽（温泉利用）、倉庫（災害用非常食等備蓄庫を兼ねる）  
1階：ショートステイ用居室（13室）、  
デイサービス用施設（最大30名収容）、  
特養居室（7室）、管理棟  
2階：特養居室（4ユニット・各10室）
- 基本居室の面積／16.32m<sup>2</sup> (1.54m<sup>2</sup>のトイレを含む)